5．まとめ

今回の調査では、7世紀末から平安時代初めまで存続した大規模な石組溝や、7世紀中頃に遡る可能性が高い石組暗渠などを検出した。全体の規模や用途は明らかでないが、石組溝は雨水などをまとめて飛鳥川に排水する施設、石組暗渠や木樋は、下水あるいは上水を流す施設と考えられる。

飛鳥寺の西から南にかけては、木樋・土管・石組溝・石組暗渠など、水の利用にかかわる多様な形態をもつ遺構が集中する特異な地域と考えられてきた。今回検出した石組溝や石組暗渠はそのなかでも最大の規模があり、重要な役割を果たしたものと考えられる。とくに、B期の石組溝SD20は全長21m以上に及び、東の丘陵地帯から流れ出る雨水等を集め、北へ排水するための基幹排水路として機能していたことが確認された。また、まわりに石敷や石列をもつ堤、石敷舗道などが順次作られ、この地域の遺構群の東限を画す施設として長期間機能していたことも判明した。この石組溝の方位は、国土方眼方位に対して北で西に30度近く振れており、ほぼ真北方位をとる飛鳥寺や伝飛鳥板蓋宮跡に重層する宮殿遺構とは大きく異なる。このまま北進すれば10m足らずで丘陵にぶつかるので、おそらく大きく西に曲がり、飛鳥寺の寺域を避けてその南を通り、最終的には飛鳥川に排水するものと推定される。

今回の調査区から西北へ約70m離れた地点では、石垣や底石をともなう池や石組溝が検出されている（飛鳥京跡第28次調査）。周辺の地形やその構造から推定すると、今回発見した石組溝と一連の遺構かと考えられる。また、石組暗渠や石組溝は、自然地形にしたがって築かれており、一部で想定されてきたような飛鳥地域の方格地割の存在が、少なくともこの地域には認められないことが確認されたことも成果のひとつに数えられよう。

さらに、A期の石組暗渠SD10内の堆積土中からベニバナの花粉が大量に検出され、上流にベニバナから抽出した染料を利用した染織に関する工房の存在が考えられるようになった成果も大きい。周辺地域における、これからの調査の進展が大いに期待される。